

田村正徳, 前田浩利 (監)

はじめよう！おうちでできる 子どものリハビリテーション&やさしいケア

伊藤 直子

(森ノ宮医療大学, 作業療法士)



子どものリハビリテーションは、新しい時代を迎えている。子どもたちの暮らす街で、OTが直接自宅や学校にうかがい、生活環境を構築しながら子どもと家族の健康を守り、活動参加支援ができる。継続的な支援体制によって子どもたちの自立や社会とのかかわりを手伝うこともできる。新しい場所で作業療法を展開するために、OTに必要な知識や技術も再編成する時期にきている。本書は、地域で子どもの支援チームを組むために必読の内容となっている。

私が訪問看護ステーションに転職するとき、この本があったらよかったと思う。病院から出て地域で働くために、自分なりにいくつかの準備を行った。1人で子どもの生活場面に入るなら、病院のようにすぐ医師や看護師に助けを求めることはできない。子どもの命を守るために必要な救急の対応や、呼吸や摂食嚥下の管理はもちろん、医療職として重い障害のある子どもたちの日々の健康を守るために自立しなければならぬと気負っていた。しかし、それは小さく生まれたり重い障害のある子どもを育てる親御さんたちと同じ立ち位置になることでもある。地域で実施している子育て支援「ファミリーサポート」の研修を受けながら、親になる覚悟で地域に出ればいんだと思えるように

なった。

子どもの健康と安寧を守るOTは、日々の検温やバイタルを評価し、その日のコンディションを確認し、注意深く新しい作業に取り組むチャンスを狙う。わずかな判断ミスでも重大な命の危険を招くことがある。気候や天候の変化に合わせて、空調や湿度、衣服を調整し、小さな咳や呼吸音等、わずかな変調のサインも見逃さない注意深い観察力が鍛えられる。実際に、生活環境の評価を十分に行いながらの地域でのチームアプローチは、病院でのリハとは違い、情報量も多く、助けてくれる仲間も増える。OTは、子どもたちが日々の作業を積み重ねながらどのように発達していくのか、時間経過を軸に置いてその現場で評価できる。環境を含めた評価を行えることで、子どもたちの可能性と未来の姿を現実的・具体的に想定することもでき、個人と環境に働きかけることで、OTの果たすべき役割もより明確になる。地域の専門職の役割は、子どもたちや家族の普通の生活を守り、家族の営みを支えていくことである。この本はその象徴であるといえる。

子どもと家族が大切にしているものは何かを理解するために、時間と空間を共有しながら家族の中に溶け込んで評価を深める。かわる人の健康も見逃せない。家族や支援者に無理が重なると子ども

の環境が破綻する。お父さんの過労、お母さんの腰痛、兄弟のストレス、祖父母の不安。一人ひとりの健康が子どもに影響する。タイミングを見計らいながら適切な社会資源を紹介することが必要である。この本ではさまざまな専門職との協業を学ぶことができる。かかりつけ医、看護師、相談支援員、専門医、教員、栄養士、時には近所の人々等、いま必要な人を探し、新しい関係を築くこともまた、専門職の役割といえる。地域でチームを創ることは一人ではできないが、誰かが声をかけなければ始まらない。

家族の生活の中の「大切な作業」、たとえば、旅行、家族写真、妹の運動会、お母さんの仕事。それらの作業を大切にするお手伝いをしながら、OTは「作業的存在」である子どもを、家族と共に育てることができる。周産期医療にかかわる医師から始まった地域での支援体制は、大きな広がりとして社会を変革し、OTも市民として参画できるようになってきた。この本は、みんなで子どもと家族を守ろうとするための入門書として、子どもの支援にあたる専門職に勇気を与えてくれる。

B5判 320頁 4,800円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357